

肺百斯篤患者ニ對スル綿紗覆口試験

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/38326

使用シ、該患者ナシテ絶對的ニ解熱セシメントシテ強テ多量ヲ反覆アルヲ以テ、或ハ本品ノ効力ヲ誤リタルノ恐ナシトセザル也

其他三年間ニ在テ予カ本品ヲ使用セル患者ハ無慮五十餘名ニシテ、中ニ醫師ノ自家成績ナモ有シ、概シテ予ニ本品對熱作用ノ好望ナルヲ觀念セシメタリ

結論 要スルニ以上ノ成績ヲ總括スルニ

- 一、I. K. 〃 結核性患者ノ發熱ニ對シニ少ナクトモ從來行ハルノ藥品及方法ニ比シニ解熱作用著シ
- 二、反應性撲滅熱ハ現存スルヲ常トス、而シテ注射後第一日ニ最も多ク、又二三日後ニ呈ハルノ熱トモナリ

文 献 目 録

1. Carl Spengler, Tuberculose—Immunblut, Tuberculose—Immunblut und Tuberculose—Immunblut (I. K.) Behandlung. Deutsche med. W.-schrift. 1908. No. 38. s. 1620.
2. Ruppel. citiert in Deutsche med. W.-Schrift. 1909. S. 1833.
3. R. Koch, citiert in Roepke & Fandeleier, Lehrbuch der spec. Diagnostik und Therapie der Tuberculose. 1911.
4. Rudloff, citiert in Deutsche med. W.-schrift. 1909. S. 1831.
5. Herzberg. Behandlung mit „I. K.“ (Spengler). Münch. med. W.-schrift. 1909. No. 5.
6. Roepke. Ergebnisse der Tuberculose—Immunblut (I. K.) Behandlung. Deutsche med. W.-Schrift. 1909. S. 1831.

7. H. Weicker und B. Fandeleier, Vebor „I. K.“ Deutsche med. W.-schrift. 1909. S. 1833.

8. Landmann, citiert im denselben.

9. C. Spengler, Vebor Tuberculose—Immunblut—(I. K.)—Behandlung. Mng.

10. A. Exner und R. Loepke (Wien), Spenglersche I. K. Therapie bei chirurgische Tuberculose. Zentralblatt f. Chir. No. 30.

11. F. Linkin Rige, I. K.—Behandlung. Beiträge zur Klinik der Tuberculose. Bd. XVIII. H. 3.

12. Schaefer. Behandlung der Phthisiker mit Spengler I.—K., Münch. med. W.-schrift. No. 46. 1910. (完)

●肺百斯篤患者ニ對スル綿紗覆口試験

清國奉天防疫醫官 松 王 數 男 (卒業)

肺百斯篤ノミナラス一般呼吸器傳染病者若クハ其カ疑アル患者ニ對シ必要時ニ主トシテ病毒飛散ノ門戸タル患者ノ鼻口ヲ被覆スルコトノアルハ勿論ニシテ斯カル際ニ用フル覆口物ハ多クノ場合ニ綿紗ヲ以テスレバ足ル余ハ今回肺百篤患者三名ニ對シ強咳嗽チ行ハシメ百斯篤菌ガ幾枚ヲ重ネタル覆口綿紗ヲ透過シ得ルヤヲ試シニ左記ノ成績ヲ得ルニ至リ

試験ノ方法

病院收容後猶ホ比較的氣勢アル患者ヲ選ビ多ク仰臥位ノ儘看護者ノ授ケテシテ上體ヲ稍起コサシメ咳嗽ヲ爲シ易カラシメ顔面ニ輕ク綿紗ヲ被ムラセ寒天扁平培養基面ヲ患者ノ口ヨリ約十仙迷篤爾以内ノ距離ニ持チ來タシ患者ニ命シテ數回強咳嗽ヲ行ハシメタル後チ直チニ該培養基ヲ被蓋シ一定ノ容器ニ格納シテ室溫ニ放置ス(低溫孵卵器ヲ有セザルガ爲メ攝氏十五六度ノ室溫ニ放置セリ)但シ此際ニ用ヒタル綿紗ハ乾性ノモノト(硝子皿ニ所用ノ綿紗ヲ疊ミ入レテ乾熱滅菌セルモノ)濕性ノモノト(滅菌綿紗ヲ更ラニ滅菌水ヲ以テ濕シタルモノ)二種ヲ用ヒ乾濕各一枚ヨリ三枚マデヲ重ネタルモノニ對シテ檢シツ、別ニ對照トシテ直接培養基面ニ向テ強咳嗽ヲ爲サシメタルモノト併セテ一人ノ患者ニ附テ七回三人ニ附テ合計二十一回ノ試驗ヲ行ヒシモノナリ

試驗ノ結果

先ツ百斯篤菌ノ有無ヲ二十一個ノ硝子皿ニ附テ檢セル結果ヲ左ニ掲表スベシ

第一表

患者姓名	乾性綿紗			濕性綿紗			對照
	一枚	二枚	三枚	一枚	二枚	三枚	
王仁	+	-	-	+	+	-	+
李順獻	-	-	-	+	-	-	+
趙明達	-	-	-	-	-	+	+

二十一個ノ可檢「シャーン」ヨリ疑ハシキ菌落ヲ逐一寒天斜面ニ移植シテ純粹培養ヲ容易ニ仕遂ケ難キ場合ニハ「マリス」體ニ接種セシメテ檢セル結果ハ即チ第一表ニ示スガ如クニシテ乾性綿紗ヲ窺透セルモノハ漸ク王ノ一枚アルノミナルニ拘ハラズ濕性ノモノニアリテハ王ト李各一枚、王二枚、趙三枚窺透シ得タリ但シ趙ノ場合ハ濕性ノ一乃至二枚ニ證明セズシテ反テ三枚ニ於テ發見シタルハ一見奇異ナル現象ナルモ實際ニ於テ咳嗽努力チ一率ナラシムル能ハザルノミナラズ時々刻々咯出スル咯痰中ニ含マル、菌量モ亦常ニ一定ナラザル以上ハ敢テ此事ノ奇トスルニ足ラザルモノナラン、唯注目ニ價ヒスベキハ濕性綿紗ノ場合ハ多ク窺透シ乾性綿紗ノトキハ容易ニ透過セザルガ如キ狀況ニアルコト之レナリ

然レドモ這ハ甚ダ見易キ道理ニシテ試ミニ乾濕ノ綿紗ヲ鏡下ニ擴大比較シ視レバ自ラ判然セン即チ濕性綿紗ノ網目ハ(綿紗ヲ織リ爲セル纖維ノ網ノ目)判然開通スルヲ認ムルモ乾性綿紗ノ方ハ細キ「フアーデン」ニテ殆ド塞カレリ、之レ濕性ノ場合ハ主トシテ液體ヲ太キ根纖維ニ吸收スルヲ以テ實際遊離ノ細纖維ヲモ共ニ吸收密着セシメ網ノ目ハ隨テ判然開通スルガ故ニ微細ノ咯痰飛沫ヲ能ク窺透セシメ得ルカ爲メナルベキコト瞭カナリ、次ニ參考上余ガ試驗ヲ行ヒシ際ノ患者病況ノ一斑(第二表并ニ百斯篤菌ト共ニ二十一個ノ可檢「シャーン」ヨリ檢出シタル他ノ雜菌ノ種類等チ(第三表)各掲表ス

表 三 第

球 菌	桿 菌
黄白橙黄葡萄 狀球菌	假性實布垚里 亞菌
肺炎重球菌	枯草菌屬 (枯草・巨大)
黄白色雙球菌	黄色桿菌
四聯球菌	靈 菌
八聯球菌	
外ニ絲狀菌二種	

表 二 第

患者姓名 病況一	仁 王	李 獻	趙明達
職 業	小 販	夫 役	磨房經勞者
年 齡	五 七	三 七	六 一
男 女 性	男	男	男
發 病 月 日	三月四日	三月三日	四月四日
試 驗 施 行 月 日	三月五日	三月五日	四月五日
死 亡 月 日	三月五日	三月五日	四月六日
體 溫	39.7°—40.5°	39.8°—40.3°	39°—41°
脈 搏	120—123	120—127	121—130
呼 吸	56—58	57—62	51—54

(原著及實驗)

第十七卷 第三號

一〇五

第七十四號

一三

第三表ニ掲クル細菌類ハ人ノ口内ニモ存在スレハ又氣中ニモ存在シ殊ニ滿洲ノ如キ飛塵ノ多キ土地柄ヲニ於テ然カモ培地トシテ面積ノ大ナル扁平培養基ノ製作并ニ之ガ取扱ノ上ニ於テ縱令十分ナル注意ヲ拂フモ猶ホ稍トモスレバ氣中細菌ノ爲メ汚染サル、コトアルハ實際ニ當リシモノ、熟知スル所ニシテ加フルニ着皇急設ノ「ラボラトリユーム」又ハ「ホスピタル」ニ於テノ此種ノ作業ハ實ニ名狀ス可カラザル困難ニ遭逢スルモノニシテ本試驗ノ如キモ實際コノ三人ノ患者ニ附シテノミ行ヒシニハ非ラズシテ之ヨリ前キ既ニ猶ホ數人ノ患者ニツイテ企テシモ皆失敗ニ了リ(主トシテ溫度ノ關係上可檢「グルツール」ヨリ百斯篤菌ヲ證明セントシテ悉ク他ノ菌ノ繁殖ニ妨ゲラレ)漸ク此三名ノ患者ニ對シテ行ヒシモノハ比較的明瞭ノ成績ヲ得ルニ至レリ

而シテ遂ニ百斯篤菌以外ノ細菌ニシテ患者ノ咳嗽ト共ニ覆口綿紗ノ何種、幾枚ヲ竄透セシヤ并ニ綿紗ノ枚數ヲ重ナル毎ニ可檢培地ニ發生スル菌落ハ減ズルヤ否ヤ等ノ普通催起スル想像ハ全く不明ニ歸セリ如何トナレバ比較的ニ口内固有ノ存在菌ト認メラル、假性質扶垚里亞菌肺炎重球菌ノ如キハ主トシテ「コントロール」ニ發生シ、濕性、乾性トモ各一枚以上ノ可檢培地ニハ其發生ヲ認メ難ク其他「ベスト」菌以外ノ菌落ハ「コントロール」ヨリモ反テ濕性又ハ乾性ノ二枚或ハ三枚ノ可檢培地ニヨリ多ク發生シ來リシ場合アリテ此ノ際使用セシ綿紗ノ種類枚數等ト雜菌ノ「コロニー」數トハ毫モ一定ノ關係ヲ指示セシメ難シ、之レ一ハ主ナル檢索物タル「ベスト」菌ノ「コロニー」ヲ涉獵スルニ際シ永ク又ハ度々可檢「シャーレー」ヲ開キテ彼是ト「ヒツシエン」セルガ爲メ自然此間氣中細菌侵入沈下シテ漸次培地ヲ汚シタ

ルニモ因ルベシ、然レドモ之レ亦斯カル作業ノ進行上避ケ得可カラザル件ニ屬ス

結論

一、呼吸器傳染病者殊ニ肺百斯篤患者ニ對シ覆口物ヲ施スハ病芽ノ飛散ヲ抑壓又ハ減削シ得ルコト明カナリ隨テ治療乃至檢診又ハ看護ニ從事スル者ハ之ガ爲メニ傳染ノ危險ヲ避ケルコトヲ得

一、此場合ニ於テノ覆口物トシテ綿紗ヲ用フルトキハ乾性ノモノハ能ク此目的ニ副ヒ得ヘシ

一、濕性綿紗ノ薄層ハ此場合ニ(三枚以下ヲ重ネテ使用スルトキノ如キ)危險ヲ防止スル能ハザルノ虞レアリ

一、綿紗以外ノ布巾ヲ此場合ニ使用スルトモ猶叙上ノ消息ヲ推察シ以テ實踐上誤リナカラント信セラル

終ニ茲ニ恩師北里博士ニ敬意ヲ表シ奉天鼠疫研究會期中柴山博士カ列國委員ニ本試験ノ經過概略ヲ紹介セラレ併セテ多忙ナル公務中ニ於テ親シク此報告ヲ校閲シ給ハリタルヲ謹謝ス

●男性「ヒステリー」患者供覽

若杉病院 寺尾秀三(醫學卒業)

「ヒステリー」ハ中樞神經症即チ自個ガ病氣デアルト云フ、想像ニ基因スルモノデアリマシテ、恐ラクハ大脳皮質中ニ於ケル機能障礙ナラント稱セ

ラレテ居リマス、乍併解剖的變化ニ至ツテハ今日猶ホ不明ニ屬スルノミナラズ、疾病ノ本態ニ就イテモ神經病理學中最モ不明ナルモノ、一ツデアリマス、本病ニ就テ「リテラツール」ヲ繼述スルハ徒ラニ諸君ヲ煩ハス嫌ヒアルヲ以テ余ハ單簡ニ大要ヲ述ベント思ヒマス、希臘竝ニ羅馬時代ニ於テハ「ヒポクラテス」(Hippocrates 377. v. Chr.)「プラトン」(Platon 348. v. Chr.)「ツェルズス」(Celsus)氏等ハ本病ハ子宮ノ疾病ニシテ情慾ヲ満足セシメンガ爲メニ子宮ノ動搖ヨリ來ルモノナリトノ説ヲ唱ヘシガ、此ノ説ハ既ニガハヌス(Galenus 164. n. Chr.)時代ニ於テ破壞セラレタリ、然レドモ病的作用ハ生殖器區域ニ於テ其ノ原因ヲ有スルモノナラントノ考ハ近時ニ至ル迄テ勢力ヲ有セリ、例ヘバ「ルイエル、ウエーローメイ」(Louyer, Villernay)「ロンベルグ」(Romberg)等ハ專ラ此ノ説ヲ主張セリ、殊ニルイエル、ウエーローメイハ最モ屢々來ル所ノ原因トシテ情愛ノ不滿、之ニ關スル苦悶竝ニ月經障礙等ヲ以テセリ、又タロンベルグハ生殖器ノ刺戟ニ依テ來ル處ノ反射の神經症ナリト云ヘリ、ウエリス(Willis 1657)ハ十七世紀ニ於テ既ニ本病ノ病竈ハ大脳中ニ在ルコトヲ主張セリ、又レポア(Lepois 1618)モ既ニ同世紀ニ於テ男性「ヒステリー」(Hysterie masculine)ヲ記載シ、又稍々同時代ニ於ケル「シットナム」(Sydenham 1681)ハ本病ニツキ非常ノ効驗アル人ニシテ、「ヒステリー」ハ神經系ノ疾患ナリト説キ且ツ附言シテ曰ク「ヒステリー」ハ一種ノ幽靈的疾患ニシテ種々ノ形狀ヲ現ハシ又タ間斷ナク其ノ色ヲ變ズルコト七面鳥ノ如ク萬般ノ疾病ヲ擬似スルモノナリト主張セリ、又タ同氏ハ其ノ當時「ヒステリー」ハ男子ニモ屢々來タルモノニシテ多數ノ男性「ヒステリー」ハ「ヒポコンデリー」ニ算入シ居ラル、コトヲ記セ